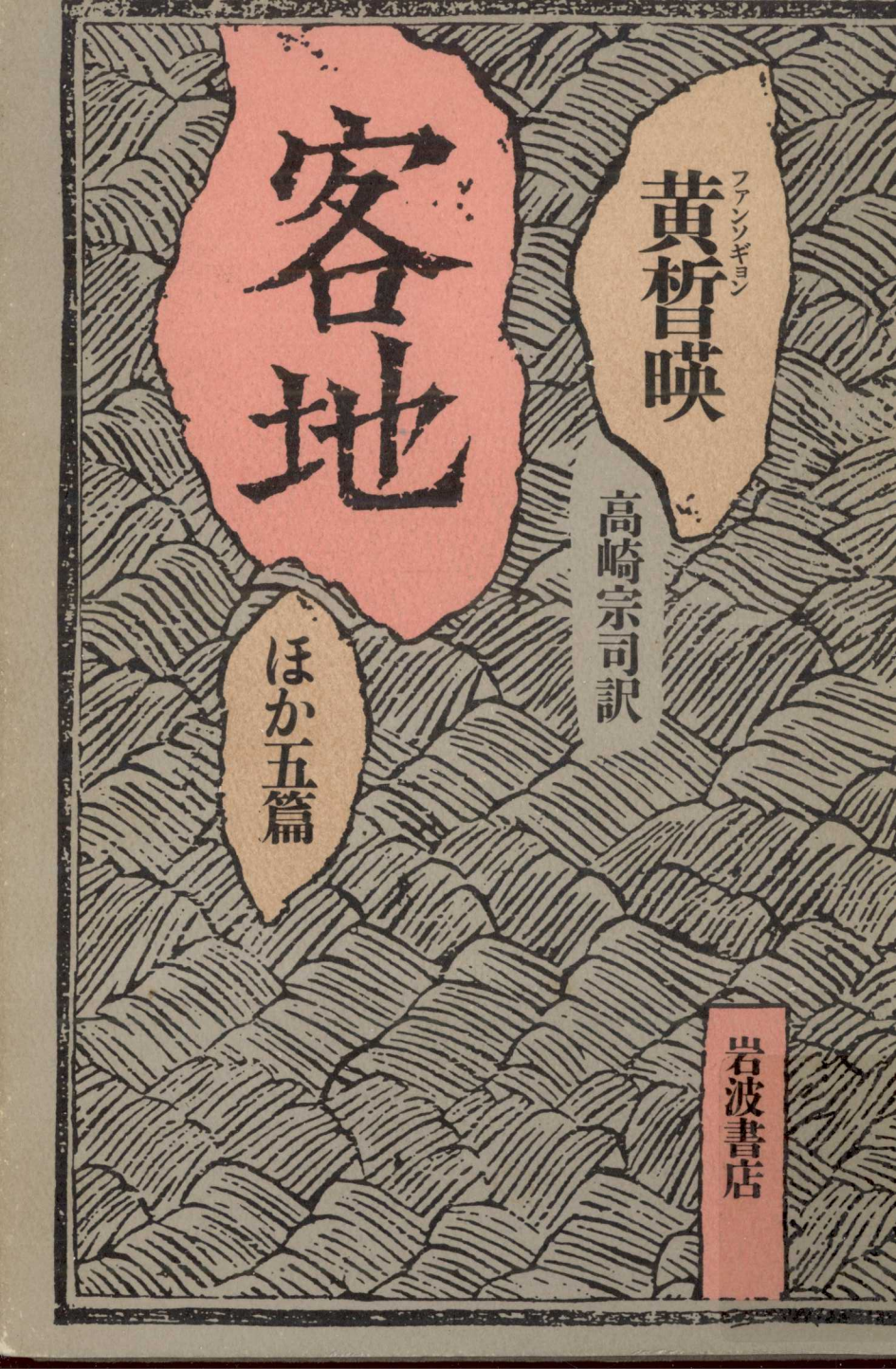




客地

ファンソギョ
黄皙暎

高崎宗司訳

ほか五篇

岩波書店

1947-9



日文 701726729

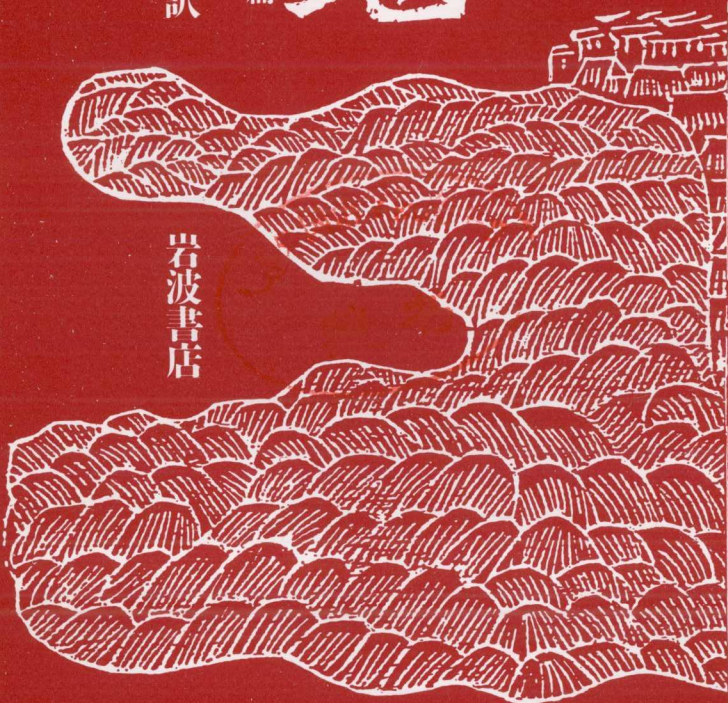
黄哲暎

客地

ほか五篇

高崎宗司訳

岩波書店



客地ほか五篇

一九八六年一〇月一七日 第一刷発行 ©

定価二三〇〇円

訳者 高崎宗司 たかさき そうじ

発行者 緑川亨 りくがわ へい

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五
株式会社 岩波書店 いずみ

電話 〇三六五二二
振替 東京六三三〇

印刷・法令印刷 製本・三水舎

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-002000-5

日本の友人たちへ

去る一九八六年春の東京での数か月は、私にいろいろと深い印象を与え、今後の私の作家生活にも多くの変化をもたらすであろう、そんな期間になりました。

われわれに苦痛と悲しみとを与えた隣国に対する深い憎悪と敵愾心が行き交う中で、私は、暖かい友人の顔を新しく発見し、何よりも、日本とアジアとのあるべき未来について心配し、われわれの困難を心から理解してくれる、その友人たちの孤独な実践とも出合うことができました。

総督府、憲兵、監獄、虐殺、強制連行、挺身隊、創氏改名、神社参拝、経済侵略、新植民主義、妓生^{オシサン}観光、軍国化、天皇主義、貿易不均衡、三角軍事安保、民族差別、指紋押捺、このような苦悩に満ちた多くの言葉を通して考えてきた日本の姿の中から、ちょうど、巨大なセメントの壁の上にきらめく砂粒を発見したように、日本の民衆の素朴で美しい姿を探し出すことができ、それこそが、今後の新しい日本の真の可能性だという確信も持てるようになりました。

東京の山谷で会った日雇労働者の汗にまみれた微笑、名古屋の飯場で、ある労働者が私にくれたたばこ入れ、そして、東京郊外の市場で出合った数多くの庶民たち、彼らの笑いと物を売ろうとして叫ぶ声、酔って地下鉄で横になっていたある中年のサラリーマン、独りで歌い、独りで拍

手し、独りでふらふらしながら家に帰る侘しい若者たち等々は、アジアの人々が言っているような新帝国日本という顔とは違ったものであるということ、そのような体制と日本の民衆とは決して一つではないということを、感じさせてくれました。日本の都市には、われわれが失うことになるだろうわれわれ自身の大事なものの、西欧産業社会の非情な社会構造、われわれを抑圧することになるだろう各種の装置を、あらかじめ見せてくれているような寂しさが、深く垂れこめていました。

これは、今、われわれが分断を通して受けているいろいろな抑圧とは根本的に違うものですが、日本の名もない個々人の侘しさは、われわれのそれと同じようなものでもあり、これからともに脱け出していかなければならない、という感じがしました。それゆえ、われわれを拘束しているのは、東北アジア全体にはめられた足枷なのです。そこで、帰国するとすぐに、私は西欧帝国主義が日本に接触したときに始まる近代日本史を、体系的にもう一度読み返しました。

この本に収録された文章は、岩波書店の安江良介氏から暖かい激励と援助をいただいていた東京滞在中に、私の親しい友人である高崎宗司氏とともに、主として、中短篇小説を集めた『客地』（創作と批評社、一九七四年）から選んだものです。それらの大部分は、一九六〇年代から七〇年代のはじめにかけての韓国の生のいろいろな局面を扱ったものであり、私がベトナムから帰還した一九六八年から七三年までの五年間に書いた作品のうちの一部です。

中篇小説「客地」は、六〇年代、私が韓半島の南道地方を放浪し、いろいろな職業を転々としていた時代の西^ツ海^ヘ湾の干拓工事の体験と、たばこ工場の飯場の体験を結びつけて書いたもので、韓国が産業化社会に入り始めたころの雰囲気を表わしています。

「韓氏年代記」は、一種の自伝的小説として、私の母方の家族の歴史を南側に局限して書いた作品であり、七〇年代にあった七・四南北共同声明が、その契機になりました。六・二五^ユ〔朝鮮〕戦争と南北分断を客観的に描くには、現在の韓国の状況は、限界が多すぎます。したがって、個人的な歴史を表現することで、同時代を比較的正確に公平に描くことができるだろうと考えたのです。

「森浦^{サンポ}へ行く道」は、七〇年代はじめの経済開発によって、韓半島の「生の抛り所」である故郷を喪失していく姿を描いています。この作品もまた、南道放浪時代の記憶の片鱗から生まれたものです。

「お嬢さん」〔原題は「織々玉手」〕は、七〇年代はじめに、なんらの社会的根拠や生活も描かれていない商業主義的恋愛小説の横行に抵抗を感じて、若者たちの愛が社会的条件の中で歪曲され制約されているかを書きたいと思ったものです。

「僻地の空」は、私の散文集『客地から故郷へ』（形成社、一九八五年）の中に収録されているルポルタージュ数篇の中から、当時、わりあい問題となったものを選んだものです。そのころ

の炭鉱の実情は、現在も特に変わってはいません。八〇年代には「^サ舎北^ブ事件」のようなものがありました。

最後に、日本で、私の保証人のような役割を引き受け、いろいろとめんどろをみ、暖かく見守ってくださった東京大学の和田春樹氏との対談は、アジア人の一員として、世界的な問題を抱えている祖国の外から、私の過ぎ去った歳月と文学を冷静に顧みさせたという意味で、重要だと考えられます。

胸を開いて、正直な目で、日本の友人たちと、夜を徹して東アジアの未来を語り合いたいと思います。

泉心常在外 石齒苦遮前

掉脱千重險 夷然出洞天

一九八六年七月 ソウルにて

フアン
黄 哲 暎
ギョソ

目次

日本の友人たちへ

I 小説

客 地……………三

韓氏年代記……………一六五

森浦へ行く道……………二九三

お嬢さん……………三二九

II ルポルタージュ

僻地の空……………三八九

III 黄哲暎は語る

韓国現代史と文学……………（聞き手 和田春樹）……四三五

訳者あとがき……………四九五

I

小説

客 地

1

五棟の合宿所の左側に並べて建てられた書記室には、三日の間、錠がおろされていた。

固く閉ざされた窓口の上に、作業班の名簿が破れたまま貼ってあり、人夫たちは炊事場の横の土壁にもたれたり、ドアの側の縁側に座ったりして、夕食を待っていた。若い者たちが人夫頭の崔チの女房に食事を催促すると、彼女は炊事場のドアを荒々しく閉めて、中から腹立たしげに怒鳴った。

「書記さんたちが来るまでは出せないよ」

人夫たちは低い声で話を交わした。

「伝票の余ったのはねえか？」

「そんなもの、とつくにみんな使っちゃったさ。借金が二千ウォンだよ。仕事を始めるまでは、食事を出さねえってさ」

「たらふく食っている奴らが暇にまかせてやりやがったんだな」

張^{チャン}さんは、仲間たちに背を向け、丘の下手にある事務室のほうを見ながら座った。現場事務所である細長いバラックの前に、人々が集まっているのが見えた。その人たちは、午後からずっとそこに集まっていたが、今はかなり減ったようだ。張さんは焦茶色の野戦ジャンパーの大きなポケットからビニール袋を取り出した。紙を裂いて、豊年草という名の刻みたばこをはたき落として盛り、指先で均^なしながら巻いていった。皮のように干からびて堅くなった指先が震え、刻みたばこが散らばってしまった。震える指の間から紙と刻みたばこがこぼれ落ちた。彼は落ちた紙切れを拾おうと手を伸ばしかけて、やめてしまった。そして、いまいましそうな表情で、後ろにいる仲間たちを見廻した。

「大尉、ちょっと手を貸してくれ」

大尉と呼ばれた背の高い男が近づいてきた。彼の肩はがっしりとしているように見えるが、背はやや曲がっていた。顔はやせぎすで、きりつとしまっている大尉が手に唾^{つば}をつけて、たばこを二本、しっかりと巻きあげた。張さんは大尉が渡してくれたたばこを受け取り、自分の手を結んだり開いたりしながら言った。

「もう、だめだな！」

大尉もたばこに火をつけて、自分の大きな掌にしみじみ見入った。彼は舌先にくつついたたばこの粉を、指先でゆっくりとひとつひとつ取った。張さんはたばこを吸うことも忘れて、まだ指を動かしていた。

「一杯ひっかければ治るんだがな」

張さんがつぶやいた。合宿所の下手には、赤土がむき出しになった坂道、砂浜、干潟、海が次々と続いていた。西の空の片隅に押しやられた太陽は赤い色を放ち、湾の両端からまっすぐに伸びる軌道車の線路が海の中に隠れていた。満ち潮に覆われた黒い浜辺は、白い砂浜と波とを分ける細長い帯のように見えた。弓形の湾の中へ伝馬船を三つ四つ繋いだ作業船がゆっくりと帰ってきた。黄昏のころにこうした風景を眺めていると、彼らは自分の口に砂の一握りも押し込まれたような気分になった。彼らは毎日このころになると、へとへとであったし、土と干潟と海の三筋の糸が織りなす全景は、実際、単調で退屈なものに見えた。

現場事務所の職員たちが、一団の人々を引率してゆっくりと坂道を登ってきた。人々は大粒の白い砂が敷き詰められた作業場を通して、こちらへ向かっていた。張さんが言った。

「新米が来たな」

大尉は答えないで、黄色くニコチンの染みたたばこの吸いさしを深く吸い込み、唾を飛ばした。

彼は袖で口もとを拭きながら言った。

「おれたちはだまされたんですよ」

張さんもうなずいた。

「そんなこと、はじめっからわかってたことだ」

「おれは気がつかなかったですよ」

人々は原っぱを横切って、こっちへやってきた。赤土の道からは、彼らが巻き起こす赤っぽい土ぼこりがあたり一面に広がっていた。遠くからでも、彼らが片手に荷物をさげているのがわかった。大尉が言った。

「首になった連中だけが損をしたんですよ」

「あいつら、あんまり調子がいいと思っちゃ」

「おれも張さんも表面には出なかったから……。首になったあの人たちは、もともとにらまれていたんですよ」

「あっちが先手を打ったんじゃないか？」

「その通りですよ」

大尉がたばこの吸いさしを足で踏みにじった。三日間のストライキは失敗に終わったが、それは彼らから進んで引き起こしたものではなかった。どこか挑発的だった気がする、と大尉は思っ

ていたのである。案の定、彼らは体よく愚弄されただけの結果になってしまった。張さんは首になった人々の頭数を口の中で数えてみた。大尉が言った。

「三十二人ですよ。この棟だけでも十四人です」

「闘って得たものは何にもなし。完全に黙殺されて、食いあげになっただけだ」

大尉が後ろのほうにいる日雇人夫たちを振り向いてから、声を低めた。

「会社側の手先が入っているんですよ」

「だれだか見当はつくのか？」

「とにかく、おれたちの中にいることははっきりしています。そいつらがわざとストライキを煽動したんですよ。これからはもっと露骨に出てくるかもしれませんね。監督組〔仕事を督励するグループ〕を中心に行動するかもしれませんよ」

「うかつだったな。先に勘定をもらっておくべきだったよ……資金がなくちゃ、長くは闘えねえからな」

「奴らは勢力を固めようとしてるみたいですね。不平分子の力が大きくなる前に取り除こうという計画だったんですよ。会社の指示通りに動いていた奴らは、事を起こすと、すぐにずらかったんですから」

「得をしたのは事務室と煽動した奴らじゃねえか」

群れをなした人々は、十棟の飯場が立ち並ぶ丘の真ん中の空き地に集まっていた。張さんが立ちあがりながら言った。

「今日から作業が始まるようだな」

「人員を補充してもらわなくっちゃね。おれたちの班でも三人いなくなったし。第五飯場が一番たくさん首を切られたけど、書記や人夫頭がなんて言ってるか、知ってますか？」

「なんて言ってた？」

「第五飯場は伏魔殿だって言うんですよ。おれたちは……」

大尉は言葉を切り、髭ひげがもじやもじやに伸びた自分のごわごわした顎あごを二度三度さすった。

「早くもねらいをつけられちゃったんですよ」

空き地から、こちらに集まってくさい、列を作ってください、と怒鳴っている声が聞こえてきた。

「見ててくださいよ。ひと騒さわぎ起こしますから……このまま引き下がりはしませんよ」

「何かいい方法があるんか？」

「団結ですよ」

張さんはかすかに首を振ってみせたが、大尉は気づかないようだった。彼は数多くの工事場で客気にはやる若者たちの行動を見てきたが、みんな骨折り損のくたびれもうけだった。他人事に

は関与しないのが年の功だと思っていた。改善とか陳情とか署名とかという行為は、彼が十余年間、労働現場を転々としている間に、ただの一度も成功したことがなかった。今回も失敗に終わり、普段から書記とか人夫頭に直接ぶつかっていた者だけが、毛抜きで引き抜かれたようにして首を切られた。大部分の日雇人夫は、こうしたことに慢性になっていて、熱気がおさまると、すぐに忘れてしまった。

空き地から飯場の下に近づいてきたずんぐりした人夫頭の崔が、両手を口もとにあてて何か叫んでいた。彼は飯場の日雇人夫を代表する年長者を探していた。張さんが彼の所に下りていくと、人夫頭は手帳をひろげて尋ねた。

「何人足りなかったかな？」

「三人だ」

張さんの答えに、彼は目を丸くし、丸々とした頬ほおをいっそう膨らませて怒鳴った。

「そうじゃない。総員のことを言ってるんだ。第五飯場全体のことを聞いてるんだよ」

「十四人」

「十四人だと。しょうがねえな。するとちょうど半分だな」

新米たちが列をなしてかかんでいる前で、書記たちが机を運んできて人員配置をしており、本社から出張してきた職員とおぼしき男が監督に怒っていた。